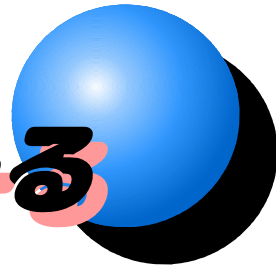




ゆい

・まーる



★VOL 16 令和3年9月1日



今月は小中学生向けの読み物が中心です



本との出会いを

ボーイズ&ガールズに

■「リンゴちゃんのいえで」

角野栄子／作 長崎訓子／絵

幸せな気持ちになれるお話です。●リンゴちゃんはお人形ですが、歩けるし、お話もできます。そして、マイちゃんと大のなかよし。ある日、マイちゃんのパッチンをリンゴちゃんが勝手に頭に付け、マイちゃんに注意されました。●リンゴちゃんは、いろいろなモノを持っているマイちゃんが意地悪に思え、家出をしてしまいます。●家出をしたリンゴちゃんが出会い、体験する小さな冒険がお話の中心ですが、泣いたり笑ったり、得意になったり、自慢したり、悲しくなったり…リンゴちゃんの気持ちがポンポン移り変わるさまは子どもそのもの。読み手の子どもたちは身近に感じるはずです。●物語がせわしく動き、読み手の子どもたちはリンゴちゃんの気持ちに引き込まれます。けっこうワガママなリンゴちゃんがかわいらしく思えてきます。おしまいはお約束のようなハッピーエンドで、心が安まります。●「リンゴちゃん」シリーズ4作目。小学校低学年に。



■「おねえちゃんって ちょっぴりせのび」

いとうみく／作 つじむらあゆこ／絵

2組の家族が1つの家族になり、新たにお姉ちゃんと妹になるお話。●主人公のココは小学校2年生。去年の春、ココのお母さんとナツちゃんのお父さんが結婚して4人家族になりました。妹になったナツちゃんは年中組で、ココよりも3つも年下だけれど、体は大きくとってもパワフル。ココは密かに〈かいじゅう〉と呼んでいます。●お話は、山梨のおばあちゃんの家でココとナツちゃんが過ごす3日間のできごとと2人のちょっとした心の変化です。ココが〈背伸び〉しながらもナツちゃんに頼られるお姉ちゃんになっていくところが一番のポイント。●ホッとして心温かくなる物語。●小学校低学年に。



■「しかくいまち」

戸森しるこ／文 吉田尚令／絵

何か大切なことを直接的な言葉ではなく、イメージで伝えようとする物語。

●何かもが四角でできている〈しかくいまち〉の〈しかくいひと〉が、川に浮いている少年を見つけて助け、一緒に暮らし始まるころからお話が始まります。



〈しかくいひと〉には口がなく、言葉も感情ありません。〈しかくいひと〉は、子どもと食事をし、釣りをし、トランプで遊んだりするうちに、胸のあたりが温くなる気がしてきます。そして、子どもは、〈しかくいひと〉のほほが時々へこむようになることに気づきます…笑っているみたい。●ある日、子どもは自分の名前を思い出し、自分の場所へ戻ることを〈しかくいひと〉に伝えます。子どもの言葉「ぼく、よくわからないけど、ここは必要な場所なんだと思う」は印象的。そして、もっと印象的な文が最後のページに用意されています。読んだ後に〈説明できない何か〉が残る作品。●小学校中高学年に。

■「チョコレートのおみやげ」

岡田淳／作 植田真／絵

物語が生まれる瞬間を体感するような作品。●「こそあどの森の物語」など児童文学の名作をたくさん生み出している作者が、登場人物を語り手にして、物語の中で語る形のお話を作りました。●お母さんの妹／みこおばさんが私につきあってくれて、異人館や港町を巡り歩いた後、途中で買ったチョコレートの箱を開け、6粒のチョコを見て、「チョコレートは時間がとけていくみたい」とつぶやきます。そして、私にきょう見たものの中で好きなものを問いかけ、私が答えると、〈ひとりの男とニワトリ〉のお話を即興で語り始めます。●お話には、私の好きなものが織り込まれ、ちょっと幻想的。そして、みこおばさんのお話の終わり方は私にはせつない



…作者は〈私〉にみこおばさんのつぶやきをヒントにお話の続きを語らせます。●お話の持つふしぎな力を感じる作品。空想したりすることが好きな小学校中高学年に。

■「ごいっしょさん」

松本聡美／作 佐藤真紀子／絵

病気で入院している宮本くんを励ますためにぼくが想像で生み出した〈ごいっしょさん〉が、クラスの中で励ましの力を必要としている子どもたちをつな



いでいく連作物語。●ごいっしょさんが来ると周りの空気がちょっと変わり、「ごいっしょさん、ごいっしょさん、ごいっしょに」と心の中でつぶやくとごいっしょさんが一緒についてきて勇気が湧いてきます。●子どもたち同士でバトンを渡すようにつないでいく6つの物語は最初に戻り、〈ごいっしょさん〉がしっかりと存在に…もう少しの勇気、パワーを必要としている子どもたちにピタシ。●小学校中学年に。

■「サーフ・ボーイズ」

南田幹太／作

今から約60年前、日本でサーフィンをする人がようやく現れ始めた時代の物語。●小学6年生の大和（やまと）と昴（すばる）は湘南育ちでサーフィンに夢中。2人は、1960年代初め頃に行われた〈狸ヶ崎クラシック第ゼロ大会〉で優勝したという同学年の少年／湘南のレジェンドのことを知りたくてたまりません。●ある日、サーフィン・スクールの校長／横山亮先生から先生も参加したというその大会のことを聞くチャンスが訪れます。●物語は、そこから一気に12歳の



少年／亮、そして亮の先生でライバルにもなる同学年の安藤誠2人のサーフィン漬けの日々を描く場面が変わります。●サーフボードや滑り止めのワックスを手探りで手作りする時代、2人が親しくなった米軍のサーファーからテクニックを学び、互いに刺激し合って腕を磨いていくさまは読み応えがあります。●2人に邪魔をする少年たちや画期的な木製のサーフボードを作り上げる船大工の老人など、さまざまな盛り上げ役が登場し、ワクワクするサーフィン物語です。●横山先生が語り終え、大和と昴の物語に戻る場面に楽しい仕掛けが用意され、笑いと感動に包まれます。サブタイトルの「伝説になった12歳の夏」の意味が分かります。●小学校高学年から中学生に。

■「31センチの約束」

嘉悦洋／文 ながん／絵

△ アドネーションを題材にした少女2人の友情物語。●小学校4年生のサラとゆいは、バレーボールのクラブチーム〈フェニックス〉のメンバーで大のなかよし。●ある日、2人は行きつけの美容院で髪を切ります。担当はなっちゃん。そこで2人は、高校生の女の子がカットした自分の長い髪を持ち帰る姿を目にします。なっちゃんの説明では、〈ヘッドネーション〉といって、病気で髪が抜けてしまう子のために髪を寄付してカツラを作り、プレゼントすること。●物語の核は。白血病で入院するゆいとサラの交換ノート〈ラリー〉のやりとりを通して、サラがゆいのためにヘッドネーションを決意すること。物語にはいくつかの枝葉があり、フェニックスの決まりごとの理由となっちゃん、カツラを手に入れたゆいとサラの行き違いの気持ち…でも最後にはヘッドネーションの意味を2人が理解し、誰かのために役立つことを読み手の子どもたちに伝えて終わります。



2人の成長物語にもなっていて、気持ち良さが残ります。●子どものガンや実際にヘッドネーションをした小学生を紹介しているので知識を得るテキストとしても使えます。読んでみて分かるタイトルの意味もステキ。●小学校中高学年から中学生に。

■「はじめての夏と キセキのたまご」

麻生かつこ／作 酒井以／絵

恐竜の化石探しを恐る小学生3人の物語。考古学や恐竜好きの子にオススメ！●世夏（せな）は小学校5年生の女の子。夏休みに入っただけで、お父さんの仕事の都合で都会から星原村に越してきました。都会が好きで世夏はがっかりです。でも、新しい家の近くを散歩していた時にムッチと陸くんという同じ学年の村の男の子と出会います。2人は恐竜に詳しく、恐竜好きの世夏はたちまち気が合い、友だちに…3人は夏休みの共同研究に取り組み、世夏のテーマは「星原村で見つけよう！謎の恐竜」。●3人の研究、恐竜の化石探しという夢あふれる探検に途中からカッコ良くて本物の恐竜博士／伊竜なずなさんが加わり、恐竜がいた太古の世界が俄然リアルになり、読み応えある作品になっています。●小学校高学年から中学生に。



■「Fができない」

升井純子／作

自分にとっての〈F〉って何だろう？を見つける物語。●優柔不断で何ごとにも消極的な中1のチョコが、兄さんから譲り受けたギターの簡単なコード（和音）の押さえ方を2つ覚えたときからチョコの周りが動き出しま



す。●どこか軽いカイトのせいでやりたくなかった文化委員になり、その初仕事は〈1年生をむかえる会〉のプランをクラスでまとめること。チョコのもっとも不得手なことです。●ある日、音楽室の掃除をきっかけにチョコのギター、カイトのボーカル、クラスメイトの堀田君のドラム、田崎さんのキーボードという即席バンドが誕生し、物語は急展開…〈1年生をむかえる会〉でデビューをめざすことに。●物語の中心は4人の関係ですが、ギターコードのFができないチョコとチョコの兄を結ぶ教師が大きな役割を果たしています。●ギターコードを少しずつマスターしていくチョコとヘタながらバンドの楽しさを感じていく4人…最後に〈Fができなかった〉チョコがつかんだ〈F〉の意味が感動的。●中高生に。

■「ここではないどこか遠くへ」

本田有明／作 みなはむ／絵

主人公は、名字に動物の名前がある自称〈アニマルズ〉のグッチ、ピーマン、プー、ワンコの4人で、小学6年生のクラスメイト。●4人それぞれ家庭の事情や家族の問題が重い荷物となり、苦しさを抱えています。●4人の一つになった思いは、〈ここではない、どこか遠くへ行きたい〉。●4人は3泊4日のプランを立て、夏休みに入ってすぐに実行に移します。1日目はワンコ希望の千葉県御宿で〈月の沙漠〉。ここで4人は物語の最後まで関わるヘレンさんという女性と出会います。ヘレンさんと話をする中で、その後の4人のプランに深みが増し、自身との向き合う力を得ていきます。2日目はグッチ希望の松尾芭蕉が訪れた仙台の松島、3日目はプー希望の富士山登山、4日目はピーマン希望の名古屋の生家。●旅をしながら4人それぞれが背負っている荷物の中身が明かされますが、ヘレンさんと出会い、日を追うごとに4人の



気持ちの持ち方が変わっていきます。それぞれの場所に重い中身を少しずつ降ろし、旅の終わりには4人そろって〈帰ろう、おれたちの街へ〉という気持ちに…。●4人が出会ったヘレンさんは、4人に大きな影響を、とりわけワンコに与えますが、ヘレンさん自身も4人それぞれの個性に出会うことで自分が抱えていた大きな荷物を軽くすることにつながっています。●4人の描き方が明確で、希望につながる旅の終わりが読み手の心を熱くします。●中高生に。

■「かげろうのむこうで」

斉藤洋／作 いとうあつき／絵

主人公の小学5年生の翔（しょう）には普通の人には見えないものが見える、涼（りょう）というクラスメイトがいます。翔は〈見える・見えない〉を通して、人やものごとには見方によって見え方が違うことをなにはなしに感じていきます。●ある日、ジャーマン・シェパードのトラウムを連れのおじさんと出会い、ふとしたきっかけでトラウムの散歩を引き受けます。●翔が出会ったり、両親を介するできごとは翔の頭・心をよぎっていきますが、作者は翔に答を語らせず、行動で気持ちを表現させているかのよう。●物語は、翔と涼の2人が関わる人たちとトラウムが一つに交わる終結の場面に向かっていきますが、翔の言葉は少なく、どう感じるかは読み手にゆだねています。児童文学らしくない作品ですが、読んでみると斉藤洋さんに出会えて良かったと思うはず。翔とトラウム、おじさんの出会いと別れの物語としても読めます。●作者が数多く書いている〈不思議〉を描く作品は、他に「アリスのうさぎ」「シンデレラのねずみ」「グレーテルの白い小鳥」「オイレ夫人の深夜画廊」「K町の奇妙なおとなたち」「アルフレートの時計台」など多数。●どれも小学校高学年から中高生、おとなにもオススメ。

